

◆ 第3回 酪農家の生き残り戦略(後)

～経営難しい低投入酪農～

第2回で、黙って今のままの交配をしていけば、高泌乳高投入路線に乗ってしまい、将来的にはTMR給与フリーストール牛舎にせざるを得ない時期が来ることを説明しました。これが第1の選択肢です。

第2の選択肢は低投入酪農です。マイペース酪農はその代表で、基本は放牧、濃厚飼料の給与はわずかしかしません。資金投入は少なく、その結果として乳量は多くても5,000～6,000キロにとどまります。循環型酪農の基本型ですが、問題点がいくつか生じます。

まず、日本の牛の泌乳能力が10,000キロ近くあるのに、それに応じた飼料を与えないことによるエネルギー不足が生じます。その結果、身を削って乳を出すため、理論上は繁殖成績が低下せざるを得ません。

飢餓性脂肪肝による産乳成績低下もあり得ます。繁殖成績の低下は、思った以上の経済的損失をもたらします。

また、最近の牛は大型化が進み、基礎代謝量が増加しているため、身体を維持するための草の量が多くなっています。そのため、気候や草地の条件にもよりますが、1頭あたり1ヘクタールほどの草地が必要になります。

さらに、低乳量のため収入が低下し、設備更新費用が捻出(ねんしゅつ)できなくなる可能性が高いといわれています。

結局、本格的な低投入酪農路線をとる場合は、付加価値の高い牛乳として高い乳価を保証してくれる消費者と直結するか、自分の代で酪農をやめる場合に限られます。草地面積が確保できることも当然必要です。

第3の選択肢は現状維持です。現状維持は何をしなくてもいいかという、そうではありません。何も考えないでボーっとしていると高泌乳高投入路線に乗せられてしまいます。

乳量を9,000～10,000キロで維持しながら(乳量がそこまでいっていない牛群は伸ばしながら)生産コストを低下させ、純益を増やしていかなければなりません。

世の中は現状を維持してくれないので、乳価の切り下げが激しくなれば生き残りは厳しくなり、相当の経営努力が必要になります。大学とNOSA Iが行っている牛群検診は、この第3の選択肢を選んだ牛群をサポートするために行っている事業です。

